

御祝儀について思うこと。

sanukisoba

披露宴というものがございます。愛しあう（別に愛しあっていなくてもいい）2人が幸せに満ちた（別に幸せじゃなくてもいい）自分たちが結婚するということを、自分たちの大切な人たち（別に大切じゃなくてもいい）に報告を行うというイベントです。少なくともそういうことになっております。

披露宴に出る際、まあ結婚式を含めてもかまわないのですが、参列する客は原則として「御祝儀」を持っていくのが一般的です。おめでとうございます、の一言とともにお渡しする御祝儀。中身は現金です。

では、御祝儀の額、こちらはいくらぐらいになるのでしょうか。これはまあ考え方によるのですが、3万円～というのが相場といわれております。3万円。はたしてこれが高いのかどうかというのをちょっと考えてみましょう。

結婚というのは大体20代から30代前半に行うのが大体のところだと思われまふ。すると披露宴の友人ゲストは大体20代から30代前半がほとんどということになります。ここで、20代前後の平均年収というものを考えてみましょう。こちらはわりと色々なところが集計していたりするのですが、大体300万円前後。もちろんここで平均だけを参照するのでは不十分なので中央値も調べてみるとこちらも大体300万円前後。つまりゲストとなる20代のほとんどは300万円前後の中から御祝儀を捻出している事となります。

御祝儀は3万円～が相場。年収は300万円前後が相場。つまり、20代は披露宴に参加する度に年収の1%を支払っている勘定となります。年収の八掛けが手取り、と考えると1.25%を支払っている勘定となります。

御祝儀の額の話になると必ず聞かれる言葉が「御祝儀は気持ちだから」という言葉ですね。「御祝儀は気持ちですから、あなたが適切だと思う額をお包みすればいいんですよ」などという、なんだいそれは戒名のときも同じような事聞くけど御祝儀ってあれかい御布施なのかい？などと言いつたくもなるような例のセリフです。

もし本当に気持ちであればいいのなら自分でイノシシを仕留めて、イノシシ肉を新郎新婦にプレゼントしてもいいしイノシシの剥製をプレゼントしてもそれはそれでオッケーなはずですが、そうした事をするとなら「もらって嬉しいものをプレゼントしないのであればそれは気持ちではない」みたいなことをもっともらしい言葉を用いて否定されてしまいます。すると結局のところ「現金で渡す額＝気持ち」という世界です。戒名相場みたい。

それはそれでいいことにしましょう。それではここで、御祝儀相場の変遷について考えてみましょう。

幸いにして私の周りにはありとあらゆる年代の男性女性がいらっしゃるので、話を聞いてみたのですが、どうやら90年代初頭あたりには3万円がベースラインになっていたとのこと。90年代以降現在に至るまで御祝儀相場は大して変化が無いとのこと。では、約15年前20代の平均年収と現在の20代平均年収を比べてみます。

約15年前の1997年、20代平均年収は大体350万円前後とのこと。それに比べ現在は300万円前後。50万円ほどの開きがある事になります（中央値のデータが得られなかったのでここは平均値だけでご勘弁を）。350万円もらっている場合、3万円というのは年収の0.8%。八掛けで手取りを想定した場合、約1.06%。

「現金で渡す額＝気持ち」とした場合、1997年の20代すなわち現在の30代後半の方が現在の20代よりお祝いの気持ちが薄い、という事になります。なお、1990年代以降物価水準はほぼ横ばい。御祝儀相場について口を出してくる方は割合40前後の方が多様な印象を受けるのですが、この方達よりは今の20代の方がお祝いの気持ちは強いという事となってしまいます。が、正直なところ世代間ギャップを割り引いて考えたとしても結婚を祝う姿勢についてはあまり変化が無いのではないかな、と思われまふ。

そこで、祝う気持ちは昔の20代も今の20代も同じ強さであるという前提にたった場合、今の御祝儀は高い、という結論を導き出しても差し支えないのではないのでしょうか。相場に変化が無いのは気持ち云々ではない何かがあるにありそうです。

結婚式の費用はどのように構成されてるかは、いわゆる結婚情報誌などの調べを参考にするとわかります。大体350万円くらいが平均で、その内訳としては新郎新婦の負担が半分、御祝儀で充当するのが半分とのこと。さらには最近「ご祝儀結婚式」なるシステムまで登場しており、こちらは費用のほぼ90%以上を御祝儀で充当し、それ以外の部分を新郎新婦が負担するというもの。

例えばゲストの人数を70人で考え、御祝儀3万円均一としましょう。その場合御祝儀の総額は210万円。

旧来の方式で350万円の披露宴を行い本人負担が175万円、御祝儀負担が175万円とした場合新郎新婦ご両人に届くご祝儀は大体35万円という事になります。

ご祝儀結婚式システムを採用し、本人負担を1割とした場合、350万円クラスの式を開くために

は325万円を御祝儀で集めなければならないのでゲストの人数は110人弱必要になりますので350万円クラスの式は難しくなります。ゲスト70人の想定であれば大体270万円クラスの式になります。

ただ、いずれにしても言えるのはどちらの場合も「自分たちの結婚披露宴の代金をゲストの負担に頼っている」ということであり、これをイベントという視点から見れば「ゲストたちが新郎新婦披露宴のための代金を支払ってあげている」というビジネスモデルであることは事実として間違いがないということです。

このようにビジネスとして客観的にみれば、どちらの形式の披露宴にせよ一定の収益を上げている胴元が存在する事に気付くはずです。そうです、ブライダル業界です。

ブライダル業界は旧来のビジネスモデルでおこなう披露宴であれば安定した収益を得られますし、仮に旧来モデルの披露宴が行えないのであれば「ゲスト×御祝儀」という数式で得られる額を確実に収益として計上できる上に利幅は旧来モデルほどではないにしても、予測可能な利益を確実に奪取できるビジネスモデルを提示すれば良いわけです。

つまり、どちらにせよ胴元は得をする、というわけです。披露宴というものを純粹にビジネスモデルとして考えた場合、それはつまりブライダル業界というイベントが、新郎新婦をメインイベントに据えて行う、イベントです。イベントである以上メインイベント協力者のギャランティと運営コスト、利益のすべてを参加費から集めなければなりません。この場合参加費が御祝儀という名前に変わっているだけというのが披露宴と言って差し支えないでしょう。

イベントには持ち出しタイプのイベントもあります。協賛といった呼び方でも良いですが、その場合新郎新婦協賛、ブライダル業界主催のイベントとなるだけで参加費＝御祝儀、ということにはわかりがありません。

少なくともブライダル業界が胴元として君臨している限り「新郎新婦がメインイベントの、ブライダル業界がイベントとなって行う、ゲストが参加費を支払って成立するイベント＝披露宴」という図式は否定しきれないのではないのでしょうか。

さてさて。非常にヤボな話をしてきた自覚はあるのですが、本当にこれがヤボと言えるのかというのは考えても良いのかな、と思うのであります。

ブライダル業界が肥えるために披露宴を開き、お祝いの気持ちとされる御祝儀のほとんどを胴元たるブライダル業界にとられてしまうイベント。

もちろん、新郎新婦が「私たちのためにこんな式を！」という披露宴こそが何よりの祝福であると考えるのであればそれはそれで良いと思います。自分が自分を祝ってもらうためのイベントを誰かを頼りに開催してもらうというのがアリカナシかというのは個人の考え次第です。

一方で、友人や世話になっている人に負担を強いるくらいであればレストランを借り切ってお食事をしながら報告を済ませれば良い。と考える人もいるでしょうし、それであれば御祝儀以外の形でのお祝いの仕方もあるでしょう。そして恐らくそのお祝いは胴元を経由せず直接本人達に届くのではないかと。

披露宴が一つの文化である事は否定しません。

ただ、ビジネスモデルの一つに成り下がってしまった披露宴というシステムを文化であるというだけで正当化して胴元を肥えさせ続けても良いものだろうか、というのは思わないわけではありません。そして胴元のために支払われるご祝儀は本当に高くないのか、とさえも。

マクロな視点で見れば経済循環のためには必要な事かもしれませんが、別な市場を含めて考えればブライダル業界のあり方が変わったとしても別の市場にも変化が及びマクロ的には大体トントンになるのではないのでしょうか。一つの扉が閉まれば別の扉が開く、というアレです。

以上、山手線の車内で御祝儀結婚式という単語を見かけたときに思った事でした。あんまり真面目に捉えないでね。